

# 山崎郷土叢書

---

NO. 41

---

47.9.1

---

兵庫県宍粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話22000

## 近世初頭の山崎藩(二)

島田 清

### 三 池田輝澄時代(続)

池田輝澄の履歴については、『寛政重修諸家譜』に詳しい。左に掲げてみよう。

巻第二百六十六

清和源氏 頼光流

池田

輝澄御称号をたまはりてのち、代  
代松平を称す。

○ 輝澄

松千代、左近、石見守、従五位下、従四位下、侍  
従、号石入、池田三左衛門輝政が四男、母は東照

### 目次

一、 近世初頭の山崎藩(二)	島田 清	一
二、 地質時代の山崎	岩井 忠彦	三
三、 長水軍記(三)	作者 不詳	五
四、 幻の西蓮寺	福井 訥二	九
五、 延宝年間の山崎		一一
六、 山崎県の役人		一一

宮の御息女督姫君。

慶長九年、播磨国姫路に生る。十四年四月、母とともに駿府に至り、はじめて東照宮にまみえたてまつる。このとき、松平の御称号をたまひ、吉光の御小脇指を拝受し、こがねにて造れる船形の文鎮をたまふ。(時に六歳)

元和元年、大阪の役にしたがひたてまつり、六月二十八日、播磨国宍粟郡のうちにをいて三萬八千石の地をたまひ、従五位下、石見守に叙任し、山崎に住す。三年、従四位下に昇り、五年、福島正則、国除かるるとき、安芸国広島におもむき、寛永三年、御上洛のとき、八月十九日、侍従にすすみ、九月六日、二条城に行幸あり。大猷院殿御迎として御参内

のとき、騎馬にて扈從し、また、台徳院殿の仰に  
より、馬場乗を觀覽に備へしかば、台徳院殿より  
鎌倉助実の御刀、大猷院殿より判守家の御刀をた  
まふ。六年十月二十三日、台徳院殿、西城新山里  
の御数寄屋にめされて点茶をたまふ。

八年八月、弟松平右京太夫政綱卒して嗣なきに  
より、其領地を兄松平宮内少輔忠雄にたまふとい  
へども、弟輝澄をよび松平右近太夫輝興が所領の  
おほからざるをもつて、二人の弟にあたへむこと  
を言上しければ、御感ありて忠雄が請むねに任せ  
られ、播磨国佐用郡の内をいて三萬石を輝澄に  
たまひ、すべて六萬八千石を領す。九年、駿河大  
納言忠長卿の家臣、河野庄右衛門照盛をめしあづ  
けられ、十三年十二月十日、赦免あり。十七年七  
月二十六日、さきに、家老伊木伊織某、公事の裁  
判、正路ならざるにより、家臣おほく離散し、或  
は党をむすび、いとまをこふにいたる。このこと  
糺明ありて、家臣多く重科に処せらる。これ、輝  
澄、つねに家中の掟、等閑なるが故なりとて領地  
没収せられ、松平相模守光仲にめしあづけられ、  
光仲が領地のうちをいて勘忍分として一萬石を  
たまひ、因幡国鹿野に籠居す。寛文二年四月十八  
日、鹿野において卒す。年五十九。一関徹心大雲  
院と号す。

室は、生駒讀岐守正俊が女。

(大正六年八月二十八日、東照宮三百年記念に  
出版された『寛政重修諸家譜』第二輯、四二二  
頁三頁所収)

『寛政重修諸家譜』は松平定信が老中をしていたときに、  
大名・旗本の各家より系図を提出させ、源・平・藤・橘  
等の諸流に整理・編集したものである。それだけに、記  
事に間違いもあり、遺漏もある。元和八年、輝澄が佐用  
郡を加賜されたときの石高を「三萬石」としているところ  
ろなど、それに該当するもので、『恩榮録』には「二萬  
五千石」となっている。左に、輝澄に関連するところを  
書き抜いてみよう。

元和元年

分知三万八千石 播州山崎 松平左近輝澄

六月六日、池田禪政四男、後、称石見守

寛永八年

分知二万五千石 播州竜野 松平石見守輝澄

八月、宮内少輔忠雄より分つ。合、六萬三千  
石。

右の「播州竜野」はいうまでもなく「山崎」の誤りである。『恩榮録』は幕府の御持筒同心小田又藏彰信の著したもので、慶長五年より文政十二年までを収めている。彰信は、「寛政重修諸家譜」編修のとき、取調御用手伝を命ぜられた一人である。

## 地質時代の山崎

岩井忠彦

美しい山、清らかな流れ、そしてのどかな里、この豊かで美しい山崎の自然はいつ頃、どのようにして形づくられ、変化してきたのだろうか。

山崎町の地図をひろげると、地形は、西高東低で、東部には全長八十三キロメートルにも及ぶ県下第二の長流揖保川が蛇行している。郡北の隆起準平原を侵蝕して土砂を運び、町の南東部に堆積し東西三キロメートル、南北八キロメートルにも及ぶ本郡最大の盆地を形造っている。

北西部には高山がそびえ、黒尾山、長水山、愛宕山と散在している。しかもこれらの山々は急峻ではあるが、連脈はなまず、不規則に分離し、点在している。この山々は約二〜三億年前に造られた地層、古世層が侵蝕されて、花崗岩、閃緑岩、石英粗面岩、粒状安山岩等が残され、峰をつくったのである。

町の南部、金谷、段、木谷、高下、青木あたりから土万方面へかけては、約二億三千万年前に堆積した秩父古世層とよばれる地層が続き、当時は海底であった。

土万の葛根の北約一キロメートルの地からは海中動物フズリナの化石が採掘される。このフズリナは二億四千万年頃の古世代ペルム紀のフズリナで、海底であったことを物語っている。揖保川の川原の小石を注意深くみるとフズリナを含んだ小石を見かけることがある。揖保川上流にも古世層があり、砕けて流れてきているのである。宍粟大橋から東へむけて、須賀沢から安志、三森方面へかけても古生層が分布しており、二億年余り前に海底で作られた古地層が隆起したことがわかる。

安富町安志から北へ約三キロメートルの地、末広の中谷からは、約一億九千万年前頃海中にいた巻貝、アンモナイトの化石が発見されている。地質学では二億五千万年前から後を中生代とよび、このアンモナイトの化石を含む地層を中生層とよん



## 和洋酒・食料品卸問屋

## 三輪又商店

TEL ② 一一七三

んでいる。

京都大学の中沢教授の研究によると、このアンモナイトは中世代のトリアス紀最初のグリプトファイセラスに属する新種であることがわかり、グリプトファイセラス・ヤホニウムと名付けられた。これは日本で初めて発見された珍しい種類のものである。

このアンモナイトの発見された中世層のトリアス紀層は、裏日本の舞鶴から夜久野、和田山、安富、山崎、佐用方面へと帯状は分布しており、夜久野・舞鶴帯とよばれ、菅野、青木の南部から土万の南部にこの土層がみられ、当時海底であったのである。

日本列島はたびたび陸地になったり海底になったりしており、現在判明しているので七回は繰り返されておられる。今から約一億年前の中世代の鮮新世に特に激しい火山活動があり、だいたい現日本列島の根がためされたのである。その後新生代に入って花崗岩層が隆起し、葛沢の北の山地、この花崗岩地帯ならびに長水山、梯、与位あた

りの粒状安山岩地帯が隆起したと考えられる。

菅野の塩田の明証寺の西の山麓に広葉樹の化石が出る。新世代中期の第三紀層のものである。約二千万年前には陸上で広葉樹が茂った地であることがわかる。

現在揖保川は山崎盆地の東端を流れているが、かつては山崎小学校の下から中井、金谷の下、城原中学校の西方を流れて中比地方面へと流れていた時期があった。

数万年前の新生代の洪積世の頃毎日毎日大へんな雨降りで大洪水の時代が続き、この頃揖保川の流れも大きく変わった。

城原中学校の西方、金谷に河岸段丘がみられるのも揖保川の流れによってできた段丘であり、現在の山崎の街並も揖保川によって作られた河岸段丘の上に並んでいるのである。

地質図をみると約一万年頃堆積した沖積層で街並のある地形ができあがっている。

国道二十九号線を東へ安志峠を越すと、峠の南方に古墳のような小さな丸い地形がいくつも並んでいる。これは地層の断層線にできるケルン・バットである。

安富町から福崎方面へ通じる道路ぞいにも同じような小山が美しく見られる。山崎断層線が走っているのである。断層線は昔から交通路になりやすく、古くから主要な道であったのだろう。

菅野の南側山麓にもこの小山がみられる。

山崎断層線が岡山西部から山崎を結び、福岡方面へ走っているのである。未確認ではあるが山崎から神戸方面へかけて直線に断層線があるだろうと専門家は予測している。

この山崎断層は長時間に大きな圧力がじりじり加わり地殻がその圧力に堪えられなくなり、地層の弱い部分にそって裂け目、すなわち断層ができたのであって、山崎断層の南側の地層は東へ向って移動している。かつて河川の侵蝕で作られていた山地の山麓がひきちぎられて残され、それが古墳のような小山となって美しい形になったのである。

山崎断層は現在でも年平均二、三ミリメートルづつ動き続けている。

この断層は新生代の洪積世、約百万年前頃から横ずれが初まったのである。

## 長水軍記 (三)

作者 不詳

狭戸・香山に於て合戦の事

却説又秀吉の陣中にては、長水勢の出陣は明日の事にあるならんと諸軍勢皆々油断をなし甲冑を解き枕を高ふして休み居たる処に突然狭戸の山陰より左三つ巴の大旗

三流真先に押立て宇野藏人祐清諸軍を督し、鯨波を作りて驚らに羽柴の陣へ駆け入り、東西南北へ割込み四方八面に切立薙立竜虎の荒れたるが如く時正に夜三更の頃に於て、秀吉の勢未だ目もさまさざる程なれば、大いに周章狼狽し、祐清の軍に倒さるる者其数を知らず。是を見て羽柴の勇将荒木、神子田、竹中、木村、石見、樋口等の諸将は、装具をも着せず裸馬に打跨り諸軍を下知して防戦す。されど突然夜襲に遭ひし上、祐清の勢大軍なれば流石の羽柴方も少しく引色になりけるを、大将秀吉之を支へ、立所に数千の兵に夫々武器をつけさせ、祐清の陣中へ押し寄せける。秀吉の兵鶴翼の陣を造って之を包囲せんとすれば、祐清の兵魚鱗の陣を造って少しも包囲せられず、陰に閉じて突き破らんとすれば、透間なく打寄て敢て破れず、兩軍とも千変万化の秘術を尽して戦ふといえども、更に勝負なく、何時果つべしとも見えざりければ、祐清怒って自ら馬に鞭うち、敵前に出でて大音声に名乗りけるは、我は村上天皇の末流、宇野国頼の後

釣道具一式

和田釣具店

山崎町福原町 TEL ② 一一五五



裔宇野藏人祐清なり。敵に有名の將あらば、速に出合つて我が大刀の切味を見よと云ひも敢えず大敵の中へと切て入れば、秀吉の陣中よりは、荒木平太夫と名乗りて祐清と鎗を合せけるが、祐清は固より鎗術の名將なれば、いかで荒木の勝つべきや。唯一戦に打負け鎗をも其場に投棄して本陣さして逃げ入りける。実に憐れなる次第なり。祐清は、勝に乗じて敵陣に乱入し、切立薙ぎ立て其勢い竜虎の荒れ狂うが如くなる折から、忽然として銃声耳元に聞ゆるにぞ、秀吉の伏兵叢の中より潮の湧くが如く起り立ち稲麻竹葦の如く現れ、祐清の勢を包圍し、鉄砲を打つ音百雷の天に轟くが如く山岳も為に破裂せんかと疑はる。然れども、天晴勇猛の祐清なれば、少しも驚く気色なく、諸軍を下知して漸く一方を切破り本陣さして凱旋す。斯くて四日にもなりければ羽柴、宇野の両勢狭戸松山の間に出合ひ、我劣らじと時をつくつて戦けるが、先づ吉番手には岡田、岡城、阿黒、安積の諸將は、二百騎を率いて敵將荒木平太夫の部下八百騎と火花を散らして攻め戦ふこと数時間に及びしが、互に多く討れ兩陣とも相図の陣鉦にて警戒を加へつつ各陣へぞ退きける。

第二番には田路、久住、内海、長谷川等の諸將百五十騎の軍兵を引率し、敵將神子田半左衛門の部下と血戦すること半時間余りなりしが、兩軍とも戦ひ疲れて引退く。第三番には小林、春名、伊和、竹内、樋口、石見、石田

山崎町中央商店街 TEL②二四六八

中村商店

宇野軍の將  
小林重清相図の鉄砲を打つ程こそあれ、我が陣々の後より足軽二十騎宛一団となり雲鳥の陣を敷き段々と討て出て、透間なく鉄砲を打かくれば、竹中等の勢大に敗れ兵を率ひて逃げ走る。祐清之を見て思ふ様、新

等の部下千騎と渡り合ひ、此所を干途と戦ひける。折柄宇野軍の將小林重清相図の鉄砲を打つ程こそあれ、我が陣々の後より足軽二十騎宛一団となり雲鳥の陣を敷き段々と討て出て、透間なく鉄砲を打かくれば、竹中等の勢大に敗れ兵を率ひて逃げ走る。祐清之を見て思ふ様、新

手は余裕あり、戦ひは今に決せざれば我軍の攻撃は今此時なりと、大に勇み三百騎の精兵を左右に従はせ、羽柴軍の千五百騎と雌雄を決せんと死力を尽して戦ひける。兩軍とも大将同志の激戦なれば、其勢力の勇猛なる千軍万馬縦横無尽に馳せ、或は首級を取り、或は追撃し或は斬殺し、或は刺違へ、或は馬上にて組合ひ、或は馬上より落ち、或は溪間より狙撃し、或は組打ちするもありて、実に阿鼻叫喚の巷となり、其戦ひ何時果つべしとも見えざれば、兩軍今を大事と攻め戦ふ。其声天を響し、地を動す。祐清又馬を躍らせ大敵中に突進す。敵軍其勢ひに僻易し、遂に引色にぞなりにける。

祐清此機に乗じ諸軍を下知して追撃すること益々急な

りければ、秀吉勢終に大敗本陣さして逃げ退く。祐清も伏兵のあらんことを恐れ、追撃を停止し、軍勢をまとめ本陣へと帰りける。此四日の戦ひに秀吉の兵多数討たれたりとの噂姫路に聞えければ、舎弟羽柴小一郎秀長は大に驚き中村新蔵、柏木赤太郎、宮川三郎助、同五郎兵衛、堅田作十郎の五人を大将とし、其他中島、山田の諸将を始め、其勢三千余騎四月五日未の刻に松山の陣に着かせける。秀吉此勢を合せ五千余騎五日の申の刻正々堂々として宇野氏の狭戸の陣へ押し寄せたり。

両軍共軍旗を山風に翻し、互に進み戦ひを挑みしが羽柴の陣より顕れたる大将浅黄の直垂に白糸威の鎧を着、土器色の馬に乗り太刀二振を横たへ、重藤の弓に白羽の矢を森の如く負ひ、真先に進んで矢を射ること鬼神の如く其早きことは中々人間業とは見えざりけり。又祐清の陣より一人の大將軍其年令二十歳前後の色白き美少年萌黄の直千衣を着し黒皮威の鎧を着、高妻黒の征矢を負ひ、五尺



斗りの肩尖刀を掲げ羽柴の陣前に至り、彼の大将と渡り合ひ、竜虎の勢ひにてはげしく戦ひけり。兩人共余り見事にうち合ふ故、両軍等しく之を見物せしが、遂に美少年の方危く見えければ、宇野氏の勇将小林重清大声を揚げて彼の美少年の勇士を早く救へと下知すれば部下の軍卒五十余騎駒をならべて進撃し、美少年を庇ひて戦ひける。

秀吉の陣よりも中村新助士卒を率いて千変万化と戦ひける。秀吉は之を見て兵を三組に分ち、祐清の兵を包囲せんと三面より押寄せたり。祐清も諸軍を下知して追つ返しつ、半時斗り息をも繼がず喚き叫んで戦いたり。実に両軍共、皆義を重んじ命を軽んずるの勇士なれば、千騎が一騎になるとても一步も引かじと先を争う決死の猛卒、誠に勇ましき戦争なり。されども余りの激戦なれば両軍精尽き魂弱りければ、自ら両方へ引退き、一息休めて又もや挑み戦ひけるが羽柴、宇野の両将も、吾れ劣らじと精兵を入替入替戦ひけるが、両軍疲れて両方へ引退く。次に敵の方より出でたる一人の大將、士卒を率いて討つて出でければ、味方よりも宇野政頼の三男宇野内匠行義、大将として討つて出で、兵刃を交へたり。両軍精兵を入替戦り内、日も西山に没しければ、勝敗なくして引退く。三日には、戦争をなさず使者を羽柴の陣に遣して謂ける次第は、戦いは明四日正卯の刻の櫓の太鼓を合図と定められける。

かくて程なく四日の暁を告げしかば、予期の如く、宇野小寺の兩軍陣間に出合、未だ一戦もなきざりしが、宇野勢の内より十四人の勇士、羽柴の軍中へ驀進し、獅子奮迅の勢いで、四方八面に薙立てば、敵の軍中誰一人も此太刀先に進むものなし。彼の勇士等は、瞬く内に二十余人に手を負せ、十四人は討取てゆるゆると宇野勢に馳せ加りたり。後に聞けば、是ぞ名に負う宇野家の大将宇野祐光、祐政其外一族の者どもにて、誠に皆ならびなき勇士なり。其後又祐光、祐政の兩將は、八百騎の軍卒を魚鱗に備え、一息に小寺勢をうち破らんとすれば、小寺は軍卒三千騎を鶴翼に開展して、宇野勢を包囲せんとす。兩陣共に千変万化の秘術を尽して戦い、竜虎の荒れ狂うが如し。何れも死は、鴻毛よりも軽んずる勇士にして一步も引かず戦しかば、屍は積んで山をなし血は流れて川をなしたり。

#### 川戸村合戦に秀吉狭戸坂を越る事

孫子曰、彼を知り之を知る者は必ず勝といへり。これ誠に百戦百勝の論にして、後生の亀鑑とすべき格言なり。されば人を謀る事は己にあり、功をなすことは天にありとかや。

却説も天正八年四月五日の酉の刻に、漸く狭戸村の合戦もすみければ、羽柴筑前守秀吉は、諸將を集め申しけるは、今や宇野氏の軍情を察するに大略数を尽して、狭

戸・香山の兩所に集まりしもの如し。果して然るときは、「長水城は兵少なかるべし、其隙を伺ひ、内部より攻むれば、狭戸、香山の敵陣は自然に退くべし。故に敵に知れざる様夜陰に乘じ、西なる山嶺を乗りこえ第一に香山の陣をうち破り、勢に乗じて長水城を攻め落さば、是万全の策ならん。苟も敵兵此謀略を論る時は川戸村にて防戦し、抜路を直下に攻落し、逃るを追うて川戸川へ追窮せんと、利非明白に論しければ、其座に居並ぶ勇士の面々皆此謀略に一決せり。此時荒木、神子田の兩將進み出でて申しけるは、若し狭戸の敵兵此謀を聞くときは必ず後より、我軍を攻るならん、然るときは、我軍空しく敵の鋒刃にかりて、一人も生存する者之あるまじと申しける。

斯て秀吉は、石田が一族に中村、中島等の諸將を添え五百余騎を本陣に残し置き、自ら四千五百騎を引卒し、嚮導者を先に立て、各兵に松明を分与し、其夜子の刻に山麓に至り、丑の刻頃に山の嶺を踰えんとする時、敵營香山の夜警の者、之を望見して独語して曰、嗚呼数多の火なるかな、最初は狐火の如くなりしが、時刻の移ると共に続出するは、羽柴軍の山を踰る炬火に相違あるまじと、大に驚き早々宇野祐光、祐政の本陣へ此由を注進しければ、宇野の兩將、早速部下の下村、石原の兩士を招き、此防禦策を議しけるに、兩士言葉を揃えて云ふには、此山中に伏兵を設け、之を逆襲して追ひ還すにしくはな



し。若此敵兵後方より攻懸るときは、味方一人も生きて帰るもの之有まじ、吾等兩人追撃を試み申さんと述べければ、祐光、祐政の兩将も此事然るべしとて、石原勘解由に三百騎を授け、川戸村へぞ向はせける。去程に、石原勢三百騎は秀吉勢を追ひ返さんと、勇み進んで山中さして駆け登る。秀吉之を見て、四千騎を一団となし、ひそかに山中を駆け降り、一度にどつと突き崩せば、石原軍も陽に開いて之を包围せんとす。然れども、羽柴軍の急撃甚しければ、石原軍も叶じと思ひけん。峻しき山をも厭はずして、先を争い逃げ降る。羽柴軍は、此機に乗じ短兵急に攻かければ、石原勢の討るるもの数を知らず。又石原軍は、川戸村にて支えんとすれども、勝ち誇つた羽柴の精兵にいかでか之に抵抗し得べき一戦をもなさずして、香山さして退却せり。秀吉の兵益々氣力を得て、川戸川へ追窮せんと進み進んで追撃す。石原軍力やや疲れ大に乱れて返し戦うもの一人もなく、大に撃たれ先を争い退却す。漸く川岸に至りけるに、折節舟少く僅三艘

## 和洋酒食料品販売

# 八百福商店

山崎町山田 TEL②〇四一三

ばかりありけれども、此舟とても船頭なく、繋ぎ捨ててありければ、各纜を切り一艘には木原の一族七人、其他都合十三人乗船して他の人々を乗らしめず、漕ぎ出しける。跡に残れる二艘の舟に我も我もと先を争い乗り込みしが、其人数は一艘に百五十人程なりけれども、小舟に多く乗れる故、河流の中央にて顛覆し、之が為溺死するもの五十人にあまりたり。中に一人水練に達者なる者水底を潜り、彼の岸に漸くこそは着にけり。又石原勘解由は僅に二十余人を引連れて本陣へ帰りける。

秀吉は、暫く川戸村に陣營を布き、使者を以て部将小寺の守る香山の陣へ宇野軍攻撃の事を申し遣しける。

## 幻の西蓮寺

福井 詫 一

今年の春先き、近所のAさんに、今宿河原の墓地に珍しい墓標があると聞き見に行つた。墓地特有の陰暗さはなく、カラリとした墓地である。入口の大地蔵から少し入ったところに、芽吹きかけた雑草に埋もれて、高さ六十糎、巾二十糎の凝灰石の、まわりの墓群より小さい墓石が目についた。雑草を引きぬいて見直すと、東面して中央に、法名釈道信、右側面に、天保二卯十月五日、左側面に、西蓮寺嘉蔵とよりやく読みとれた。Aさんの云われる如くこの西蓮寺が珍らしいのである。

それ以来暇ある毎に、西蓮寺について聞き廻ったが、要領を得ぬまま今日に至っている。寺名の確に刻つてある以上、天保二年頃には、実在していたのは事実であろう。知り得たことは、富士野町の角の谷口さんあたりから東北方太神宮から、山崎ボールの敷地にかけて古くから西蓮寺畑といわれている事である。特に神仏合祀時代の例をとって太神宮が相当大きな古社であり、付近に一字の寺院が建立されていたであろう事は考えられる。太神宮の東隣りの空地に古老達のいう寺井戸らしい井戸もある。蓋をとって覗いて見ると、中程から下はうす暗く見えぬが、上方の組石はさほど古くはない。これが西蓮寺の井戸とする確信はない。このあたり緩い傾斜地で、水田も二、三枚あった由である。井戸も五、六ヶ所はあったが、ほとんど住宅建設でつぶされてしまった由。この斜面地も、西蓮寺畑と云われているので、相当大きな寺であるような気もする。然し、それとわかる古株も石組も見当らず、名のみよりやく残しているだけである。もっとも、西蓮寺は、千草念仏で有名な寺である。何かの都合で墓を山崎へ移したのではと、電話で問合せたが、当寺は浄土真宗にて、そちらの墓標の釈と刻んであれば、一向宗であるとの返事である。山崎町の寺々にたづねても分らない。昔長水攻めに焼失したという話も記録もなく、当時あった官弦寺、長泉寺、長光寺などの話は残っているが、西蓮寺のないのは不思議である。墓標

の天保二年は、今から約百四十年前で、さして古い事でない。この年には、西播地方にも大地震があり、灯籠、鳥居、碑石等の倒壊、組ずれ、台ずれの被害が多く、又頼山陽の没した年でもある。西蓮寺も別の見方からすれば、山崎地方にあった寺々と同格でもなく、檀家といったものがなく、細々とつつましく自給自足仏に仕えていた庵寺式のお寺にすぎなかつたかと想像されるのである。今に伝わる西蓮寺畑の大きな地域の名を残したこの寺が、百四、五十年前後に忽然と消滅したとは考えられない。どうしても不可解のままの幻の寺と云うより他はない。この西蓮寺について、諸彦の御教示をお願いする次第である。又この探求について、何かと御指導御便宜を給わりました福井政一氏と三木辰由氏とに厚く感謝の意を表します。



# 延宝年間の山崎

- 一、 山崎町長さ清水口より門前町出口迄拾丁余
- 二、 同町数 拾町 役家 三百四十五軒
- 内 五拾八軒無役
- 三、 同町分地子米 九拾石六斗六升六合七勺
- 右之内免許之地子差引
- 残る八拾四石式斗五合八勺
- 但去年午年分地子当未春納分
- 一、 同酒屋 參拾軒
- 酒造米 四千三百六十六俵
- 公儀へ書上ケ申候通りに御座候。
- 一、 同家持人数 千三百九十二人
- 男 七百二十人 女 六百七十二人
- 一、 同借家人数 千式百七人
- 男 五六二人 女 六四五人
- 人数合計 式千五百九十九人
- 男 一、二八二人 女 一、三一七人
- 一、 同町中牛馬数 牛五二疋 馬七疋
- 一、 寺数 拾ヶ寺外ニ八幡宮
- 興国寺 大雲寺 光泉寺 随陽寺
- 願寿寺 恩沢寺 妙勝寺 明源寺
- 円明寺 寿院

一、 運上免許 舟四艘 二 英賀屋弥次兵衛

二艘 出石彦右エ門

延宝七年九月二十七日

九 鬼 平内

中 西 清左エ門

横 井 宗兵衛

神 屋 岩エ門

④ 本多忠英が郡山より山崎町へ転封になった時の

記録。

# 山崎県の役人

一、 山崎藩の官員人名簿

大参事 武 間 利 庸

権大参事 橋 保

小参事 樽 井 守 城

同 松 井 正 路

同 安 原 植 之

大 属 富 和 清 世

同 児 島 武 信

同 萩 田 重 之

権大属 桑 田 久 親

